

平成 29 年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	普及	題名	インタープランティングを利用したトマトの高収益周年栽培		
[要約] 高軒高ハウスにおけるトマト栽培では、インタープランティングによる短中期どりの組み合わせることで、商品果収量28.0t/10aが得られる。30a規模の経営を想定した場合、基幹従事者2名+臨時雇用2名で収益性が高くなる。					
キーワード	トマト	インタープランティング	周年栽培	○技術部 南部園芸研究室 企画管理部 農業経営研究室	

1 背景とねらい

本県におけるトマト栽培は簡易パイプハウスを利用した夏秋どり作型が中心であり、平均収量は 12t/10a と横ばいが続いている。生産規模拡大および収益性の向上には、収量の増加と単価の上昇が必要である。そのため高軒高ハウスに適應した、規模拡大を可能にする作業労力の低減および高単価期の出荷を狙い、インタープランティングを用いた新たな作型を構築する。

2 成果の内容

- (1) 本作型は 1 作目は 3 月上旬定植 7 月末栽培終了の短期どり（7 段）、2 作目は 7 月上旬定植 1 月末栽培終了の中期どり（14 段）を組み合わせた作型である（図 1）。
- (2) 2 作目は 1 作目の栽培期間中に定植するインタープランティングを用いる（図 1、2）。
- (3) つる下ろし作業は 1 作目には行わず、2 作目の 9 月に 1 回行うだけであり、授粉もクロマルハナバチを用いるため省力的である（図 1）。
- (4) 商品果収量は 1 作目 12.0t/10a、2 作目 16.0t/10a の計 28.0t/10a が得られる（表 1）。
- (5) 本作型での粗収益は 10a あたり 933 万円、利益 182 万円であり、家族経営規模（基幹従事者 2 名 + 臨時雇用 2 名）を想定した場合、30a 規模まで拡大可能であり、このときの粗収益は 2,800 万円、利益は 622 万円である（表 2、図 3）。

3 成果活用上の留意事項

- (1) この栽培による労働時間は、誘引棚高 2.7m の高軒高ハウスでの作業を想定しており、パイプハウスでも栽培可能であるが、つる下ろし等の作業が増加する等の留意が必要である（図 3、9 月の雇用労働分の増加要因）。
- (2) 栽培は複合環境制御条件下で行った。
- (3) 固定費のうち、施設費には木骨ハウス、育苗ハウス、温風暖房機、炭酸ガス施用装置および複合環境制御装置等を含む。
- (4) 販売単価は、実証圃から収穫した生産物を、市場出荷、産直、個人販売した実績値を用いた。
- (5) インタープランティングによる年間 2 作栽培において、2 作目が 1 作目と重複する期間の農薬使用は両作の使用実績となる。

4 成果の活用方法等

- (1) 適用地帯又は対象者等 県内全域、指導機関、トマト生産者、新規就農者
- (2) 期待する活用効果 トマト菜類の周年作型導入による生産拡大
5 年後の栽培見込み面積 5 ha

5 当該事項に係る試験研究課題

(H25-12) 中山間地域における施設園芸技術の実証研究 [H25-29/国庫委託]
(4000) 中山間立地特性に適應した収益性の高い園芸品目の技術実用化総合実証
外部資金課題名：中山間地域における施設園芸技術の実証研究の実用化実証(食料生産地域再生のための先端技術展開事業)

6 研究担当者 太田祐樹、吉田徳子、有馬宏

7 参考資料・文献

平成 28 年度 試験研究成果書(研究) トマトの長期栽培におけるインタープランティングを利用した作型開発

